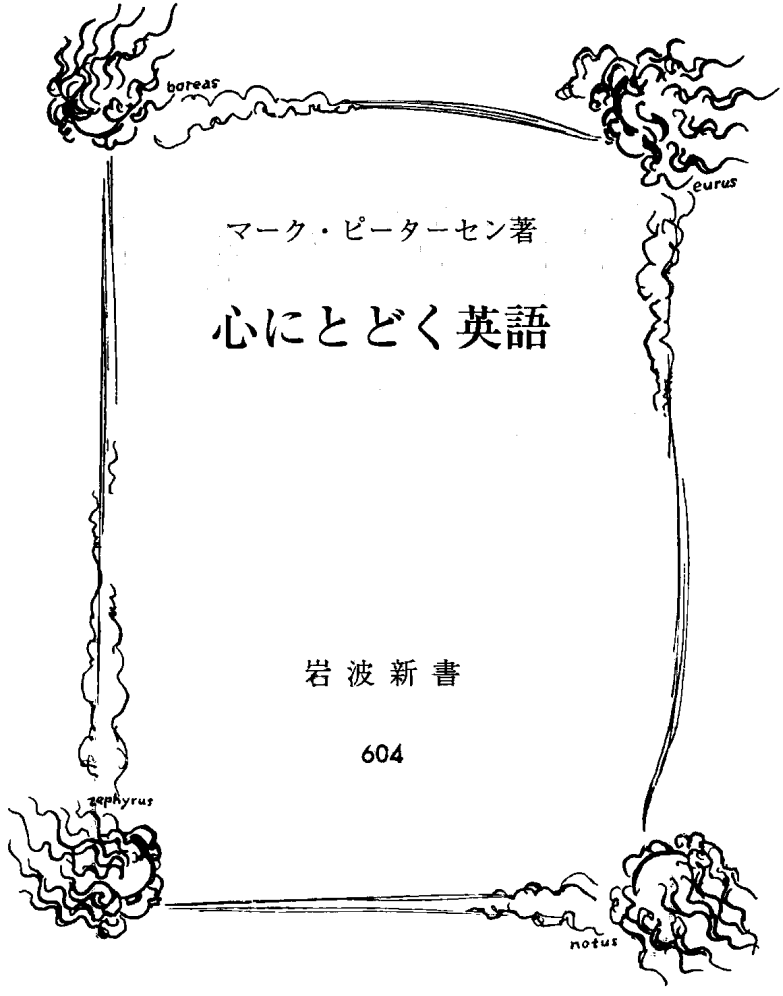
マーク・ピーターセン著

心にとどく英語

岩波新書

604



マーク・ピーターセン著

心にとどく英語

岩波新書

604

マーク・ピーターセン(Mark Petersen)

アメリカのウィスコンシン州出身．コロラド大学で英米文学，ワシントン大学大学院で近代日本文学を専攻．1980年フルブライト留学生として来日，東京工業大学にて「正宗白鳥」を研究．
現在―明治大学政治経済学部教授
著書―『日本人の英語』『続 日本人の英語』(岩波新書)など

心にとどく英語　　岩波新書(新赤版)604

1999年3月19日　第1刷発行

著　者　マーク・ピーターセン

発行者　大塚信一

発行所　株式会社 岩波書店
〒101-8002 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

電　話　案内 03-5210-4000　営業部 03-5210-4111
新書編集部 03-5210-4054

印刷・三陽社　カバー・半七印刷　製本・中永製本

© Mark Petersen 1999
ISBN 4-00-430604-3　　Printed in Japan

まえがき

外国語を覚えようとすれば，勘違いや誤解がおこるのは当然のこと．実際に使おうとすれば，思いどおりにはいかない——．些細な例だが，私の場合，「あさづけ」のことをずっと「朝漬け」だと思っていたことがバレて，いささか恥をかいたことがある．また，ある日山中をドライブしている時，友人に「綾南川(あやみなみがわ)につり橋があるけど，行ってみない？」と言われて，「えッ？ そこで本当に釣れるの」と答えてしまったことがある．その時は，それを洒落だと思った友人の笑いから一瞬のうちに自分の誤りを悟り，「外人にしてはなかなか上手いだろう」といった感じの微笑を浮かべながら黙っていてうまくいった．いずれにしても，言葉の問題は言葉の問題に過ぎないし，ましてや外国語での失敗は，あまり気にしない方が健康的だろう．

とはいっても，すべての失敗がこれらの例のように「無害」のまま終わるとは限らない．私の経験からいうと，下手をすれば大切な友情さえ失ってしまうこともある．やはり，言葉には力があるのだ．

前著『日本人の英語』『続 日本人の英語』では，主に英語を書くこと・読むことを課題の中心に据えたのに対し，今回は，人とのさまざまな関係に応じて繰りひろげ

られる英語表現の豊かな世界を紹介することに主眼をおいた．そうした意味で題名を『心にとどく英語』としたのである．

このタイトルには「日本人の」というフレーズはないが，いうまでもなく前著と同じように，書き進める過程で始終日本人を意識していた．正確に言えば，日本語という魅力的な言葉を母国語とする人間が，その言葉の強い影響でとかく苦手と感じる英語を，自分なりに日本語で考えながら説明してみたのである．確かに，私が日本語でものを考えると，まず語彙が不足していて，頭の回転が一段と遅くなり，一種の「思考障害」すら感じることがあるのだが，英語のことを英語で考えても，問題は見えてこない．日本語で考えてみて初めてその「苦手」の原因が浮かび上がってくるのだ．

数年前のこと，ワシントン大学で日本語を教えたことがある．海外に行っている担当教授に代わって，日本語を専攻している三年生の後期の授業を担当したのである．そこで一人のアメリカ青年が教科書を出してこんなことを訊いてきた．

「この文で〈私は行くのです〉と書いてあるのに，前に習ったレッスンでは，〈私は行きます〉という例文がありました．どちらも，たぶん，“I'm going to go.” のことではないかと想像はしますけど，だったら，〈行きます〉と〈行くのです〉とは，いったいどう違うんですか．」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

おそらく，「行くのです」と「行きます」の使い分けをむずかしいと感じたことのある日本人はまずいないだろう．が，英語圏の日本語学習者はまさにそうした「説明するまでもない分かりきったこと」こそ，いちばん「苦手」とする．それは「英語の観点からすると，ピンとこない」からである．

逆に英語は，冠詞や時制などの文法構造から語彙にいたるまで，日本語とはまったく違う発想と論理に支えられているので，常に日本語のどの表現に対応するか，という交換作業をとおして理解しようとすると，必要以上にむずかしくなる．この本の「I 英語の発想」は，そういった英語習得の妨げになりやすいものを更めて簡単に指摘しておきたいと思って書いたものである．いわば“Basic”であって，そこで展開した基本的な英語の考え方は，この本の全編を通じて生きているということを，ここに断っておきたい．

また，多数の映画のシーンからセリフを引用して紹介しているが，身近かに英語教材の宝が無数に存在すること——映画の教材としての面白さと有用性——を知っていただくのも，一つの目的だった．そこには生きた英語がつまっているのである．

「行きます」と「行くのです」の違いを理解できなかったアメリカ人の青年に，それぞれの例文の文脈に照らしながら日本語の“論理”を簡単に説明すると，納得で

きない，と不服そうだった彼の表情は，急に「なんだ，そういうことだったのか」と明るくなった．多くの場合，「苦手」なものを「普通」に思えるようになるプロセスとは，見る角度をちょっとだけ変えることに過ぎないのである．

目　次

まえがき

I　英語の発想 …… 1

1　マラソンが彼にチャレンジする　*1*
2　時制はドラマをつくる　*14*
3　will ではないが might ではある　*24*

II　日常もドラマだ …… 33

1　頼れるレトリック　*33*
2　宿題は「have の世界」　*40*
3　get をモノにして　*45*
4　「微妙なこころ」を添える　*56*

III　会話にスパイスを …… 71

1　excuse で世渡り上手　*71*
2　you は you でも「あなた」じゃない　*88*
3　「入場券でも売ったっていうのか」　*113*

IV　意思貫徹の会話術 …… 129

1　隠された「つもり」 *129*

2　女を侮辱する表現あれこれ *145*

3　去る者は日々に疎し *162*

4　care は人間関係の要 *171*

謝辞——あとがきにかえて …… 189

I　英語の発想

The truth is rarely pure and never simple.
真実が純粋なことなどめったにないし，単純では決してない．

——Oscar Wilde, *The Importance of Being Earnest*

オスカー・ワイルドの戯曲は，言葉の遊びが実に多い．上のセリフは，「純然たる真実」という意味をもつ常套句 "the truth, pure and simple" にかけている．ワイルド本人の分身と言われる主人公のアルジェルノンは，友人に「信じてもらえないかもしれないけど，今ぼくが説明したのは，the truth, pure and simple だよ」と言われて，"The truth is **rarely** pure and **never** simple" とうまく洒落ながら，人間というものに対する深い洞察を示すのである．

1　マラソンが彼にチャレンジする

対応関係の呪縛

アメリカの大学院に通っていた頃，日本語を専攻しているアメリカ人の学部生の集会をときどき図書室で見かけた．集会といっても大きなテーブルに七，八人集まって，日本語で会話をしながら昼食を取るのが唯一の活動で，その名を "Japanese Lunch Club" という．日本の大学で見かける ESS を思わせるような雰囲気のある学生たちだった．彼らのしゃべる日本語がちょっと妙な感

じだったので，なるべく聞かないことにしていたのだが，はっきり覚えている表現が一つだけある．一人の男子がしきりに，人の話に相槌を打つかのように，「シル，シル」と言っていたのだ．何のことだろうと思っていると，そのうち，英会話でよく耳にするI know, I know(わかる，わかる)のつもりで言っていることが分かった．

なるほど，知る＝know，分かる＝understand と，日本語の単語をそれぞれ一つの英単語に対応させて覚えているのだ．いうまでもなく，日本語では，たとえば「今夜，まりちゃんも来るのかな？」と訊かれて「分からない」と答える場合もあれば，「知らない」と答える場合もある．これは「まりちゃん」に対する意識の問題である．ところが，英語ではこの意識の違いをイントネーションで表わし，表現自体はいずれもI don't knowとなる．日本語と英語との間では，こうして一見対応するようにみえるが，実際には，それぞれの意味合いは部分的にしか重なっていないという単語がきわめて多い．

日本人の大学生の英作文を見ると，英語力の程度がどうかということより，日本語の影響からくる先入観がその英語の中に入りこんでいるのが印象的である．たとえば，「先週末，私は「川口マラソン」に挑戦した」のつもりで，

Last weekend, I challenged the "Kawaguchi Marathon."

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

などと書く．「(何かに)挑戦すること」が "to challenge (something)" という英語になると，50人のクラスだったらほぼ50人の学生が思い込んでしまっていると言ってよいだろう．

あるいは，英語の時制については，多くの場合，たとえば，「はい，(いま)分かりました」のつもりで，

Yes, I understood.(はい，〔あのとき〕分かっていました.)

などと書き，また「分かっています」のつもりで，

I am understanding.(私は，人の気持ち，立場などの分かる人間だ.)

などと書く．つまり，日本語の「～た」が英語の過去形に相当するものであり，「～ている」が英語の現在進行形に相当するものだと思いこんでいたりする．

すでに出来上っている英文を読む時は，言葉自体が正確に分かっていなくても，その思惑を文脈から十分合理的に推論することができる．ところが，いざみずから英語を作るとなると，母国語と「一対一」で対応させて覚えていることが，一種の足枷となってくる．

マラソンが彼に challenge する

何かに挑戦すること(あるいは「チャレンジすること」)が，"to challenge (something/someone)" ではないとしたら，どういう英語で表現できるだろうか．根本

的なレベルで言えば，英語の to challenge は，「挑戦すること」ではなく，「挑戦へ誘いかけること」である．だから，マラソンと参加者との関わりを他動詞の challenge で表現するなら，

The marathon **challenged** the runners.（そのマラソンは，参加者には試練だった．）

となる．つまり，“challenge” と「チャレンジする」とは，主体が逆である．

あるいは，ある人に「じゃあ，マラソンができるなら，やってみろ」と言うときに，これを challenge でまとめるなら，

I **challenged** him **to** run in a marathon.

となる．このように人を目的語とする challenge は，実に頻繁に使われている．たとえば，

We **challenged** them **to** a game of doubles.（私たちは，彼らにダブルスの試合を申し込んだ．）

という，「(競争・試合などへの)呼びかけ」を表現するケースが多い．その「呼びかけ」自体が a challenge だから，「よし，やろうじゃないか」と応じたり，逆に断わった場合は，

We **accepted** their **challenge**.

We **refused** their **challenge**.

と名詞の challenge を使って表現される．同様に，またマラソンと参加者とのかかわりなら，

He accepted the **challenge** of the marathon.

などと言ってもよい．この表現では，まるでマラソンの方から「俺を甘く見るんじゃないぞ．それでも，やってみるか」と挑発されているような気持ちになった彼は，「じゃあ，挑戦しようじゃないか」と応じた，といった感じの理屈が働いている．つまり，「挑戦する」のは彼なのだが，「challenge する」のは，マラソンの方なのである．

また，次のような使い方もよく見かける．

The United States Olympic Team **challenged** the gold medal.

これは決して「アメリカのオリンピック・チームが金メダルに挑戦した」という意味ではない．実際，1998年10月22日の *New York Times* 紙にこんな見出し文があった．

U. S. May Seek to **Challenge** East German Medals(米，東独のメダル破棄を要請する)

1968-88年の間，東ドイツの選手が国家の公式プロジェクトで，定期的にステロイドなどの禁止薬物の投与を受けていたことがはっきりしてきたので，アメリカのオリンピック委員会は，その選手たちの試合結果を取り消すべきだ，と公式に訴える予定だという記事である．

この to challenge は，物事の「事実」や「正当性」などを疑った場合，相手に立ち向かって異議を申し立て，

理非を決定するための「対決」を申し込むことである．「挑戦者」という意味の challenger（チャレンジャー）も，この使い方から生まれた．つまり，昔，王位の「正当性」を疑って「今の王は国王であるべきじゃない．国王であるべきなのは，この俺なんだ」と，異議を申し立て，この問題を解決する「対決」を申し込む人がしばしば現われ，そうした，冠をかぶってみたい人を "a challenger to the throne" と言ったのだ（challenge の語源は「誹謗」である）．そして，the heavyweight crown（ヘビー級の冠）などと，何でも「王座用語」を使いたがるボクシングの世界では，「本当は俺がいちばん強いから，ヘビー級の冠をかぶるべきなのは，この俺なんだ」との申し立て者を，challenger と言うのである．

「挑戦＝challenge」の確率は四分の一？

私の机上の CD-ROM 和英辞典（『プログレッシブ和英中辞典』第二版，小学館）では「挑戦」という見出しの下に，「挑戦する」という動詞を使う和文用例が四つある．その中で，

「彼は単身 8,000 メートルの山に挑戦した　He **undertook to** climb the 8,000-meter mountain all by himself./彼は世界新記録に挑戦した He **made an attempt** to set a new world record./世論に挑戦した He **flew in the face of** public opinion〔**defied**

public opinion.]」

という三つの用例の英訳では，“challenge” が使われていない．実際に使われているのは，こうである．

「彼はジョンに 100 メートル競走で挑戦した．He **challenged** John **to** a 100-meter race.」

この日本語の具体的な内容，つまり，彼とジョンとの競走がすでに行われたのか，それともこれからなのかは，文脈次第だろうが，

He **challenged** John **to** a 100-meter race.

は，はっきりと「挑んでみた」だけという意味であり，実際，競走自体が行われたかどうかは，問題にされていない．

日本語と英語との間の，似てはいても厳密には対応しない単語として，“challenge” と「挑戦」は，きわめて象徴的な一例なのである．

英語らしい英文をつくる

日本語と「一対一」で覚えた単語を並べてみても，有用な英文を作ることは不可能に近い．たとえば，男性に大金を貸した女性が，返してもらうはずの日に，彼に「返せない」と言われたとする．その金で，ある支払いをする予定だった彼女は，非常に困って，「私をどんな立場に立たせてしまっているか，分かっているの？」と彼を責めたてる．彼女のこのセリフは，英語ではどう表

現されるだろう.

まず，学校英語から発想すると，「立場」は standpoint か position か，「分かる」は understand か know か，そして「立たせている」は are making me stand でも一応なんとかなりそうだけど，最後に，前置詞を使うべきかどうかなど，つなぎ方にちょっと迷ってしまう，といった感じにならないだろうか．たとえば，"Do you **understand** the **standpoint** which you **are making me stand**(あるいは stand **on** それとも stand **in**)?" などにするかもしれない．ところが，このセリフのもっとも普通の英語の言い方は，

Do you **realize** the **situation** that you'**ve put me in**?

である.

「分からない」のは鈍感だからか

まず，語彙のことだが，場合によって「分かる」という意味になる "understand" と "know" と "realize" という三つの単語には使い分けがあって，ここでは "realize" がピッタリ合う.

具体的には，"know" はある「知識」がきっちり頭に入っている状態，"understand" はある「意味」をしっかり理解している状態，そして "realize" はある「意義」に気づいている状態を表わすのが基本であり，使い分け

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton